



東北 復興日記

まだまだ

▶▶ 236



仙台市若林区長

白川由利枝さん

仙台市若林区では東日本大震災で被災した二つの小学校が閉校になりました。そのひとつの旧荒浜小Ⅱ写真Ⅱが震災遺構として、今年四月末から公開されています。

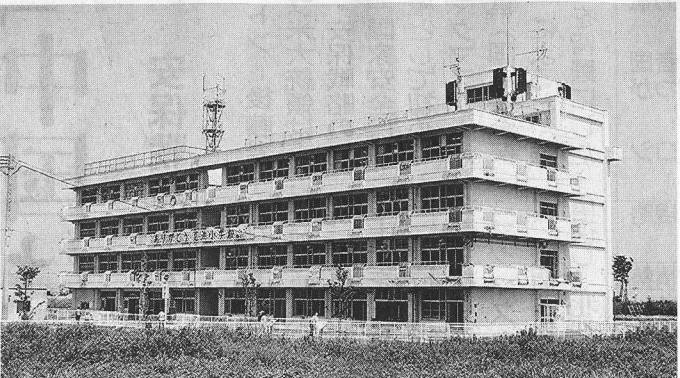
あの日、黒山のような津波に襲われ、大量のがれきをのみ込んだ濁流が校舎の二階まで達する中、屋上に避難した児童や地域の方々は一全員無事でした。どうやって命

記録と記憶 伝え未来へ

を守る事ができたのか、被災した校舎で津波の威力を実感しながら、助かった方々の証言と映像を

ご覧ください。旧荒浜小は地下鉄東西線の荒井駅からバスで十五分ほどで、国内外からたくさんの方が見学に訪れています。

荒井駅の駅舎に併設された「せ



んだい3・11メモリアル交流館」も、震災の記憶と地域の昔を伝えてくれます。

若林区を含む仙台的沿岸部には、藩政時代から独自の文化が継承されてきました。「居久根」と呼ばれる屋敷林は風や日差しを避ける役割を果たすだけでなく、切り出して建物の補修や家財をつくる材料になります。木になった実は食糧、落ち葉はたい肥にすることもできます。

居久根が点在する田園風景は、息をのむほど美しく、杜の都の原点ともいえるエコでサスティナブル(持続可能)な暮らしがあります。

この地域にある七郷小学校では市民団体などの支援を得て、毎年、未来のまちの模型をつくるワークショップを実施しています。

ここで育ち学んだ子どもたちは、たくさん緑に囲まれた低層の住宅、再生可能エネルギーのシステム、津波避難タワー、そして震災の記録と記憶を伝え、日常的に住民が集い交流できる防災ミュージアムなどを「未来のまち」になくしてはならない装置であると考えます。

国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組」が目指すレジリエンス(回復する力)のための人材は、こんな環境から育つと信じます。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。